激減した武士たちは、鉄扇を護身用として持ち歩いた。鉄製なので、刃を払うことも相手を叩きのめすことも可能な武器ともなった。それを裏付けるのは、扇切（おうぎきり）と称する武術の存在である。扇切は扇を剣に見立てた格闘術で、江戸時代初期につくられた軍記などで確認できる。「権威と武器は、手に入れると使いたくなる」というのが常だ。この噺の殿様のように抵抗できない家来に対して用いるようになる。こういう権威主義や力の行使を笑うことこそ、落語の役目であろう。

●蕎麦売り・うどん売り（おすわどん）

上方はうどん、江戸は蕎麦が好みと思ってしまうが、江戸では一七六〇～七〇年代ごろまで、うどん屋が中心だった。次第に蕎麦人気に押されて「うどん屋」が「蕎麦屋」に変わったのである。一八〇〇年代中頃の『守貞漫稿』では「京坂は店売り・担ひ売り、ともに温飩（うどん）を専らとし、蕎麦を兼ね売る。江戸は蕎麦を専らとし、温どんを兼ね売る」となる。一八〇八発刊の『福来笑門松』の中にも「風鈴蕎麦とうどん」とあり、挿絵の担ぎ荷にも「二八蕎麦うどん」と貼紙がある。風鈴蕎麦は風鈴をつけた屋台を担ぎ、夜の江戸を流して歩いた蕎麦屋のことで、蕎麦の振り売りを江戸では夜鷹そば、うどんの京坂では夜啼きうどんと呼んだ。大火が何度も起きた江戸では、幕府が、火を扱う商売の振り売りを禁じて屋台店にするお振れを出すが、振り売りがなくなることはなった。

●占い（ちきり伊勢屋）

古くは占いは未知・未来を知るための、国家による宗教的行為で、その行為は世界中のあらゆる民族にみられる。占いは二つに大別される。自然界に現れる鳥獣の行動変化や天体の変化を「前兆」として占うものと、道具や方法を用いて人為的・積極的に予兆現象を観察して占うものである。後者の代表的なものが易（卜占）であろう。自然科学や医学の進歩によって、それまで不可解だった自然現象や病が次々と解き明かされ、経験や体験も蓄積されデータとして活用されるようになった。では、江戸時代はどうだったのだろう。既に原始的なシャーマニズム社会ではなくなっていたが、巫女や祈祷師や人相・手相を見る占い師は存在していた。食い扶持を稼ぐための俄商売で、未来を知るための宗教的行為とはかけ離れていたが、善行に導く役割は果たしていたようだ。

次回予告

第 666 回 日本橋劇場（中央区立日本橋公会堂）にて。

12月20日〈水〉よる5時30分開場／6時00分開演

星野屋	◉ 三遊亭わん丈
鹿政談	◉ 古今亭文菊
死神	◉ 桃月庵白酒
汲みたて	◉ 三遊亭小遊三
芝浜	◉ 柳家小満ん

公演予定 2024年 1月25日〈木〉/2月29日〈木〉/3月29日〈金〉/4月25日〈木〉

▣ 当世噺家気質 その249・柳家さん喬と「ちきり伊勢屋」

「ちきり伊勢屋」は、柳派代々の腕利きが演じてきた人情噺の大作である。二代目、三代目、四代目の小さんをはじめ、二代目談洲楼燕枝らが手がけた。落語・講談速記の専門雑誌「百花園」には、二代目禽語楼小さんの速記が10回連続で掲載されている。

由緒正しき大物だから、寄席や落語会のトリネタとして演者にも観客にも親しまれるのは当然だろう。ところが、現実には「ちきり伊勢屋」の演者は少なく、我々観客が高座で出くわす機会は滅多にない。

「ちきり伊勢屋」が"幻の大ネタ"になったのには、訳がある。

第一に、噺が長い。長すぎるのである。速記雑誌に10回連載が必要なぐらいだから、まともに高座にかければ２時間でも収まらない。

内容的にも、「主人公が自分の葬式を自分で仕立て上げ、棺の中から本番を見ている」などという趣向の面白さはあるが、全体的に見れば、淡々と物語が進むだけで盛り上がりに欠けるーー。「ちきり伊勢屋」はまことに厄介な大作なのだ。

昭和の戦後は、六代目三遊亭円生や八代目林家正蔵（のちの彦六）が、時たま独演会で演じた。さらに、埋もれた落語や珍品を多く手がけた二代目桂家文蔵が「２時間ぶっ通しで『ちきり伊勢屋』を演じる会」を開いて話題になった。その文蔵が「『ちきり伊勢屋』をやらないか？」と後進の若手にやたらに声をかけた。その中に柳家さん喬もいたのだという。

「でも全部は教わっていないんです。いいとこだけの抜き読み。それからしばらく経って『ちきり伊勢屋』を通しでやりませんか、とお声がかかったんです」

何を隠そう、声をかけたのは当会、TBS落語研究会のプロデューサーだ。

「今の（三代目）文蔵さんから先代の通しの台本を借りて全体を頭に入れた後、自分の工夫を加えて練り直しました。長い噺をダレずに聴いてもらうには、ドラマチックな要素が必要です。登場人物それぞれの物語を膨らませて・・・なんてやってたら、長い噺がさらに長くなっちゃった。結局、2006年12月の第462回から3回連続で高座にかけました。全部合わせると２時間をかなりオーバーしましたね」

さん喬はネタを練り上げる時、あえて台本を作らない。大まかな筋を把握したら、ひたすら稽古を繰り返す。そのうち登場人物が勝手に動き出すのだという。

「そこまできたら大丈夫。演者の私は、登場人物を追いながら『ああ、そっちへ行くのか。それならこういう筋立てに』と物語を整理していけばいいんです」

さん喬流の自在な落語作り。噺の完成後に大きく内容が変わることもしばしばだ。

「『ちきり伊勢屋』も、最初は全体をドラマチックにと思っていたのに、何度か演じているうちに、主人公の鶴次郎と、彼が命を助けた娘とのラブストーリーになりました。『死を宣告され、運命に弄ばれる鶴次郎が人を恋するのはなぜ？』と考えながら、演者の私は2人の行末を追いかけていくだけです」

今回は連続ではなく、一夜限りの長講である。我ら観客は、また新しい「ちきり伊勢屋」に出会うことになるかもしれない。

（長井好弘）

第六百六十五回

落語研究会

日時●令和五年十一月二十九日〈水〉よる六時開演

会場●日本橋劇場（中央区立日本橋公会堂）

主催●TBSテレビ

《演目》

加賀の千代● 春風亭朝枝

噺家の夢● 三笑亭夢丸

将棋の殿様● 柳亭市馬

《仲入》

おすわどん● 林家正蔵

ちきり伊勢屋● 柳家さん喬

三味線 松尾あさ子　笛 三遊亭伊織
太鼓 柳亭市童
前座 柳亭市遼

新・落語掌事典（二四五）

田中優子

●家紋（加賀の千代）

噺の中で、千代が殿様と対面した折に着物の紋が目に入ったというくだりがある。この紋とは江戸時代に加賀藩の領主だった前田家の家紋、剣梅鉢のことである。梅鉢は単の梅の花を正面から見た形を図案化したもので、五枚の花弁の各々の間に小剣の剣先を描いたのが剣梅鉢である。同じ前田家でも宗家と支藩とでは剣の大小や形に多少の違いがある。いずれも梅鉢からのバリエーションで、他に中央が星のように見える星梅鉢など数種類がある。幾つか説があるが、平安時代に公家が乗っていた牛車につけられたのが始まりのようだ。宮中に出入りする際に、自分の車と他者の車を見分けるためにつけたと考えられている。この見分けは武士の時代に旗や幕につけられ、戦場では必然となった。同士討ちを避けるためだけではなく、味方の士気を挙げるのに大いに役立った。

●お金では買えないもの（噺家の夢）

「金銭による楽な生活」というのは、好きな道に進んだものの、なかなか経済的には楽になれない噺家らしい夢である。今でも地球上では、場所によって貨幣の価値に大きな格差がある。日本企業はそれを利用し、外国の安い労働力で生産し、国内では高い金額で売って利益を得てきた。しかしそれもおしまいである。一部の輸出企業と商社だけが莫大な利益を得ているが、それも長くはない。際限なき円安のもとで、この夢の噺家のような経験をするのは、ドルやユーロや元を持って日本にやって来る外国人たちである。日本人は外に出たら逆の経験をする。今や安い労働力とは日本人の労働力を意味するようになった。怖いことに、日本の自給率は凋落している。輸入できなくなれば飢える。お金では買えないものの共有こそが、今見るべき夢かも知れないことを、この噺は教えてくれる。

●鉄扇（将棋の殿様）

鉄扇は、骨組みを鍛鉄でつくった扇である。また、鉄製で畳んだままの形の、開かないものも鉄扇といった。元々、扇は武士が威容を示すために常に携帯するアイテムの一つだった。鉄扇は戦国時代に、軍陣用や護身用として使われていた。江戸時代に入り刀を抜く機会が

（裏面へつづく）